

2009

# 函館学

キャンパス・コンソーシアム函館  
合同公開講座

函館学2009

講義資料

平成21年6月27日(土)午後2:00~3:30

「中世史の中の函館」

称名寺住職 須藤 隆仙

会場:函館国際ホテル

主催 キャンパス・コンソーシアム函館

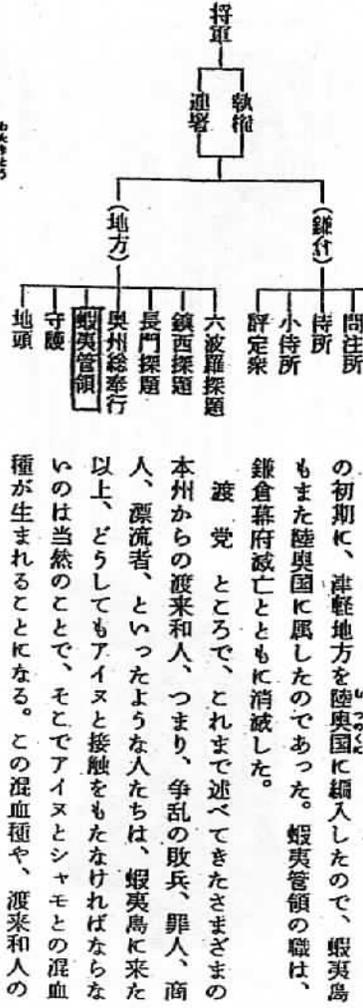
# 中世史の中の函館

須藤 隆仙

## 蝦夷管領と渡党

鎌倉幕府 ふつう、鎌倉時代から織豊時代までを中世と呼んでいる。すなわち中世とは鎌倉・南北朝・室町・織豊の各時代の総称である。この時代は、本州から和人がどんどん入り込み、道南地方はすっかりシャモの天国になってしまふ時代である。シャモとは前述のように、アイヌが自分ら以外の和人を指している言葉であり、北海道でいえば、本州から渡って来た和人たちのことである。

鎌倉幕府が編集した『吾妻鏡』という史書に、鎌倉幕府が罪人を蝦夷島へ島流しにした記事がある。建保四年(一一二六)に、強盗や海賊など五十余人を奥州につれ出し、蝦夷島に追放せよと命じたといひ、また文暦二年(一一三三)にも、夜討ち人や強盗を関東に集めて、蝦夷島に流せとの命令が出されている。このころの蝦夷島は、執権北条義時(よしのり)の代から「蝦夷管領」という職をおいて、奥羽とともに治めることにしたが、この蝦夷管領の職には、津軽(青森県)に住んでいた安東氏が任命され、津軽におりながら蝦夷島にも気をくばっていたのである。また、蝦夷島は津軽とともに出羽国に属していたのだが、鎌倉幕府の初期に、津軽地方を陸奥国に編入したので、蝦夷島もまた陸奥国に属したのであった。蝦夷管領の職は、鎌倉幕府滅亡とともに消滅した。



子孫を、「渡党」といつたのである。

渡党については、本州の史料にも貴重なものがある。長野県の諏訪神社に『諏訪大明神絵詞』がある。これは南北朝時代に書かれたものだが、なかに津軽の安東氏が反乱を起こしたとき明神のご靈験があったという記事を述べ、その乱の背景にいた北部蝦夷のことを記している。それによると、「蝦夷が千島」と称される処が東北の大海の中央にあって、三百三十三の群島に、「日ノ本」「唐子」「渡党」の三種の蝦夷がいる、と説いてある。日ノ本というのは、千島をアイヌ語でチヌプカ八日の出る処Vというから、千島アイヌのことらしく、唐子は樺太アイヌである。これに対して渡党こそが道南地方の住人と考えられるが、その渡党という人種は、つぎのように説明されている。

「渡党ハ和国ノ人ニ相類セリ。但饑饉多シテ遍身ニ毛ヲ生ゼリ。言語俚野也ト云トモ大半ハ相通ズ。」

これに対して日ノ本や唐子は「九歌ヲ重ヌトモ語話ヲ通ジ堅シ」と記している。すなわち、渡党だけは言葉がだいたい通じて、容体も和人とよく似ているといふのである。アイヌとシャモとの混血種である様子がよく描写されている。

このころの函館はどうなっていたかという点、まだハコダテという地名は生まれていなかった。右の絵詞には渡党の国に「宇曾利鶴子」と「万堂宇満伊犬」という所があると記している。ウソリケシというのには函館のことである。マトウマイヌは松前である。ウソリケシは正しくはウシヨロケシで八湾の端Vという意味だ。ウシヨロはのちに略されてウスとなり、ウスケシとなったのだから、ここにいう宇曾利鶴子のほろが元の地名なのである。そして絵詞にはこれらの所人は「多く奥州津軽外ガ浜ニ往来交易ス」と記している。これは大変に重要な記事である。といふのは、学者のなかには、宇曾利鶴子や万堂宇満伊犬を青森地方の地名だと主張する人がいる。だが、奥州へ行って交易するとなれば、それは青森の人ではなく、正しく蝦夷島の人なわけだ。宇曾利鶴子が昔の函館であることが立証されている。また、たつた一行の記事でこそあるが、これによって、当時の函館地方(または道南地方)の人びとの生活の一面がわかることだ。青森地方に渡って交易したりしていたのである。当時の人びとの生活力の旺盛さが彷彿としてくる。現代でも青函連絡船を利用して行商をする人がいるが、当時の人々も、しよっぱい河(津軽海峡をこう呼ぶ)を往来して、元気に生活していたのである。

以上によると、鎌倉末期から南北朝時代にかけての道南は、「渡党の時代」といえるのであつて、函館や松前はそのころすでに、人の多い場所となつていたのである。

渡党の党だが、これは武士集団を意味する語である。当時の蝦夷管領だつた安東氏と関係ある武士が、あるいは蝦夷の渡党を統率していたのかも知れない。とにかくこの時代は、アイヌと和人の混血種の世界であつたのだ。

## 本州和人の定住

南北朝時代にはまた、渡党と称される人たちの世界に、だんだんと本州和人の定住がみられてくる。函館には、その物的証拠がのこされている。

板碑 江戸中期の宝暦二年(一七五二)、大町に住む神家で井戸を掘つたところ、一つの石碑が出てきた。丹塗りの小さな祠に頭蓋骨一頭を納めたものと、銅に九曜紋のある刀・長刀・甲冑の金具などもいっしょに出てきた。碑のほうは仏画が彫つてあり文字もあるのだから、称名寺(当時は今の弥生小学校の場所にあつた)に納めて供養をした。石碑だけは今も保存されていて、昭和四十五年(一九七〇)に北海道の有形文化財に指定された。石碑はこの地方産出の安山岩で造られ、仏画を彫つた供養塔である。中世にはこのような石の塔婆が全国的に造立されたのであり、扁平な板状の碑だから、これを石碑の分類上「板碑」と呼んでいる。大正七年(一九一八)に出た『北海道史』(北海道庁刊)に、この碑の模造品の写真を載せたため、価値を疑う

八があるが、実物を見れば、まさしく貴重な中世の実史料である。仏画は阿彌陀如来礼拝図と、阿彌陀如来迎図とが陰刻してあるが、来迎図の下に碑文があつて、江戸後期にこれを調べて『蝦夷島奇観』などに記録した村上高之丞は、碑文を「貞治六年 丁未二月日 旦那道阿 慈父 慈母 同尼公」と判読した。近年函館市の隣りの戸井町でも同種の板碑が発見されたが、このよ  
 つな供養塔婆は、よほど定住性のある生活をする人でないと建てないから、函館近辺に和人が定  
 住し始めた証拠として、じつに貴重である。貞治とは北朝の年号であつて、その六年は南朝でい  
 えば正平二十二年（一三六七）に当たる。北朝の年号を刻む板碑は津軽地方にも多い。刀や武具  
 口から、この碑に關係する人はある程度の身分を有する人とも考えられる。（碑と他の出土物と  
 關係がないとする学者もいる。）



石室山阿彌陀如来礼拝図  
 石室山阿彌陀如来迎図  
 石室山阿彌陀如来礼拝図  
 石室山阿彌陀如来迎図



永享11年の銘がある鰐口

鰐口 また少し時代が下るが、現在函館市石崎町の石崎八幡神社にある鰐口は、「奉寄進夷  
 局脇山神御宝前 永享十一年三月日 施主平氏盛阿弥敬白」との銘があつて、これも道指定  
 （昭和四十三年一一九六八）の有形文化財である。文化年間に山神の社があつた場所から出土し  
 たものだが、永享十一年（一四三九）は室町時代前期であり、津軽地方に平を姓とする豪族がい  
 たことが確認されているから、その分家が渡来してきていたのかも知れない。板碑の「道阿」も  
 鰐口の「盛阿弥」も、念仏信仰に端を発するひとつの文化階層に多く用いられた阿号（阿弥号）  
 であつて、これらは、定住者の文化水準を考ふるうえに貴重な金石文である。  
 工藤氏 なお幕末の書『蝦夷実地検査考録』には、曾我兄弟に殺された工藤祐経から五代目の工  
 藤祐長が渡つてきていたとも記し、その子孫は箱館で宝来屋という問屋を営んだとしているが、  
 武士の渡来説として注目させられる。

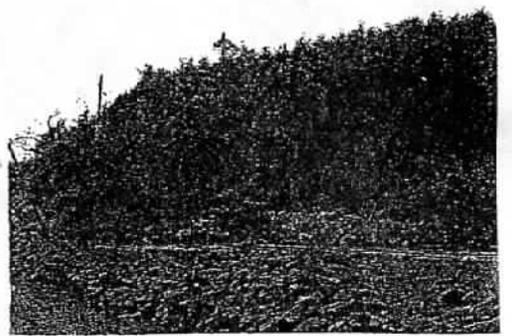
商 船 すでに和人が定住し始めた函館地方に、早くから本州の商船が渡来するようになる。  
 てれば、函館近海でとれるコンブを買いにくるのであつた。  
 『事物起源辞典』（東京堂出版）に、「蝦夷松前や津軽の昆布は、平安朝の昔から海路北陸路の若  
 狭に伝送され、小浜の市で加工調整して、京をはじめ四方に送りだした」とあるが、ここにいう  
 『蝦夷松前』とは、現在の松前町のみをいうものではない。北海道全部が松前なのであつて、  
 『広辞苑』に松前を「北海道の総称」としてあるとおりである。その松前地においては、函館東  
 海岸のコンブが多く若狭（福井県）へ移出されたのであつて、この函館東海岸を「宇賀」といつ  
 ちから、「宇賀ノ昆布」として『庭訓往来』に記載されている。『庭訓往来』は室町前期の著作

といわれている。するとそこに書かれていることは、もちろんそれ以前の事実なわけだから、す  
 なわち函館地方からのコンブ移出は、室町期以前からなされていたわけである。なお「宇賀」の  
 地名については、戸井地方に限定しようとする説もあるが、平凡社『大辞典』が宇賀を「函館の  
 異称。古くその海岸を宇賀の浜といふ」と説明している如く、函館から戸井にかけた広い地域を  
 いったのである。

松前家の『新羅之記録』によれば、室町前期、すでに宇須岸（函館西部）には、問屋ができて  
 いたことが記されている。「宇須岸全盛の時、毎年三回充、若州より商船来り、此所の問屋  
 家々を渚江に掛造りと為して住む。依て繩を縁の柱に結び繋ぐなり」とあるのである。若狭か  
 らの商船は毎年三回づつき、宇須岸の問屋は浪打ちぎわに家をかけて造り、船の繩を縁の柱に結  
 んだというのである。

随岸寺 また同記録はそのころ、その商船に若狭から嘉峰という坊さんが乗つてき、宇須岸に  
 随岸寺という寺を建てたとも記している。何宗だつたかの記載はないが、この僧は商人から宇須  
 岸の盛況を聞いて、伝道目的で来たのだから、宇須岸はちよつとした町になっていたのだから  
 う。嘉峰和尚は郷里から若松を鉢に植えて持つてき、それを植えたところ、大木となつてから枝  
 が若狭の方へ伸びたので、人びとは「思いの松」と呼んだとの話も記されている。嘉峰和尚が死  
 んと松は枯れてしまったそうだ。本州からの移住者が、やはり心中淋しい思いをして住んだこと  
 を物語るものであらう。枯れた松を人びとはまた「嘆きの松」と呼んだそうだ。嘉峰なきあと随  
 岸寺は寂峰和尚（やはり若狭の人）が継いだそうだが、寂峰はその枯れた松の枝で薬師如来像を  
 刻み、若狭へ行って寄付勸募してきて堂を造り、祀つたという。「枝薬師」と称されて人びとに  
 尊信されたらしいが、怪光を放つ不思議があつたそうだ（「伝説」参照）。随岸寺は、後述するコ  
 シヤミンの乱で松前へ移転するのである。  
 これらの話は、函館地方が、かなり本州和人の町になつてしまつていたことを物語るもので興  
 味深い。

定住者 北陸地方から商船が来るようになって、函館近辺はますます定住者がふえた。  
 市内石崎町の石崎八幡神社に、永享十一年の銘がある鰐口が現存していることはすでに述べ  
 た。鰐口は寺社の軒につるし、参拝のさいに鳴らす金属製の具だが、これは文化年間に脇ノ沢か  
 ら発掘されて石崎八幡神社に納められたものである。脇ノ沢は旧石崎村の字で、別名を宮ノ沢と  
 もいう。昭和四十一年（一九六六）に函館市に合併された地区だが、それ以前は市外だった。脇  
 ノ沢が宮ノ沢と呼ばれるのは、文字どおり神社があつたからで、その神社こそ鰐口の銘にある  
 「脇ノ沢山神」である。山神は山に鎮座する神、つまり「やまのかみ」で、永享十一年（一四三九）  
 といえは室町前期であり、このころすでに山地を生活に必要な場とする人たちが現われていた証  
 拠として、この鰐口は貴重である。また奉納者の「平氏盛阿弥」は、いわゆる阿弥文化に見られ  
 る一種の文化階級者であることも前述のとおりで、前出の貞治年間板碑の「道阿」名とともに、  
 注目すべき存在といえる。津軽地方の板碑等にも阿弥号の見られるものがあり（阿弥は略して阿  
 だけを使う場合も多く道阿の如く、ために阿号ともいう）、とくに中世の津軽地方に安倍（安  
 東、安藤）、源、丹治、平、橋などを称する豪族があつたとの考証があるから、これらの豪族の



長慶天皇伝説の丘

て来たことを示す一例といえよう。この例は他にもあり、亀田村に松本氏が渡って来て住んだ話が、松浦武四郎の『蝦夷日誌』に出ている。松本氏はもと足利氏の臣だったそうだが、のち会津の葦名氏に服従したのだそうで、それが渡来したというのである。なお開拓使編『北海道志』に、この事実を葦名氏が渡来したと記しているが、それは間違いで、葦名氏に服従しておった松本氏が来たというのである。

これら武士団の移住と関連して、室町初期に京の金工後藤の一派が松前地方に渡来した説もある。松前藩の『福山秘府』によれば、応永年間(一三九四―一四二八)後藤の一派が足利の治世をきらって蝦夷島に渡つたと記されている。その装飾する刀は「蝦夷後藤」と称されたという。とにかく道南地方にはこのように、武士団も多く来たわけである。

また単なる伝説の域を出ぬ話でこそあるが、長慶天皇が来たのではないかと、との説もあるのである。長慶天皇は南朝第三代の天皇だが、在位疑問説である不遇の天皇で、流離した話が全国各地にあり、旧銭亀沢地区の汐泊川流域(函館市豊原町)にも御陵伝説があるのである。観音山と通称される丘があつて、かつてそこから菊花紋のついた皿が出たとか、青琅玕の勾玉や天國(飛鳥時代の刀工)の剣も出たとかで、明治三十八年(一九〇五)に函館の住人が「長慶天皇の御陵ではないか」として、宮内省に上申したのである。長慶天皇伝説は青森地方にもあるが、宮内省では昭和十年(一九三五)になつてから観音山の調査を行なつた。もとより想像の域を出ない話だったのだから、なんら得るところはなかつた。だが、最近でもここを調べにくる人があつた。なお考古学者はここを山城のチャシ(砦)で、戦いを目的とした砦、あるいは見張場としての性格も強いとして、概略を『函館市史・通説編第一巻』に記している。

### 志濃里館と箱館

館 室町初期、道南にいくつもの館があつたことは、『新羅之記録』に明記される。館は「たち」とも読み、平安時代には国司や郡司の邸舎をいい、転じて貴人の邸宅をも意味した。中世では「やかた」ともいい、地方豪族の城砦的生活居所をいうようになった。多くは方形で、土塼や濠をめぐらしてゐる。『新羅之記録』に記す館はつぎのとおりである。

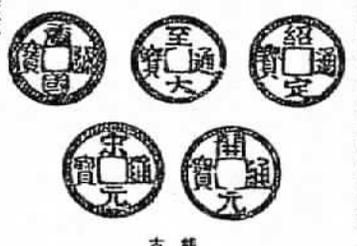
支族が函館地方に渡つてきて、板碑や罎口のよ  
うな仏教遺物をのこしたとみてよいであらう。  
右の石崎村はさらに銭亀沢と呼ばれる地域に  
含まれるが、その銭亀沢地方に和田一族が流  
れてきて住んだとの伝説もある。和田氏とい  
は、三浦義明の孫義盛が三浦半島(神奈川県)  
の和田に住んで和田氏を称したもので、源頼朝  
に従い侍所別当として活躍したが、のち北条  
氏に憎まれ、建保元年(一一二二)滅ぼされた。  
末流は越後などに住んだが、その支族が渡つて  
きたというもので、これは当時、本州各地での  
武士集団のトラブルから、その敗者が逃げ渡つ

| 館名   | 所在地        | 館主   |
|------|------------|------|
| 志濃里館 | (函館市志海苔町)  | 小林良景 |
| 箱館   | (同市元町・弥生町) | 河野政通 |
| 別館   | (上磯町字茂辺地)  | 下国家政 |
| 中野館  | (木古内町字中野)  | 佐藤季則 |
| 脇本館  | (知内町字浦元)   | 南条季継 |
| 磯内館  | (福島町字吉岡)   | 蔭土季直 |
| 大館   | (松前町字東山)   | 今泉季友 |
| 大館   | (同町字西館)    | 下国定季 |
| 大館   | (同町字原口)    | 近藤季常 |
| 大館   | (同町字原口)    | 岡辺季澄 |
| 大館   | (同町字原口)    | 厚谷重政 |
| 大館   | (同町字原口)    | 蛸崎季繁 |
| 大館   | (同町字原口)    | 相原政胤 |



志濃里館全景

この外にも江差町、泊村観音寺館(館主・小山隆政)や、戸井の館(館主・岡部某)その他があつたから、道南には十数カ所に館があつたと見てよい。その館主は多く本州の豪族の流れで、なんらかの事情で本州におられなくなり、渡海してきた人が多いようだ。出身地は小林、上野、河野、伊予国、下国、北津軽、蔭土、北津軽、相原、甲斐国、近藤、若



古銭

古銭 中国から輸入された古い銭。わが国では奈良・平安時代に銅銭(皇朝十二銭)や金銀銭が作られたが、やがて律令国家における政治力の弱体化で銅銭事業は停止された。その代わり平安末期には中国から唐銭が流入し、鎌倉時代には宋銭、室町時代には明銭というように、中国銭が多く輸入され、これらが国内通用の貨幣として使用され、江戸初期まで続いた。中世では中国銭が日本の正貨だったのである。道南からは多くの中国銭が出土している。古い記録では文政四年(一八二二)戸井で唐銭・宋銭・明銭が数万枚出土しており、銭亀沢の地は、昔、船に入つた銭が発見されたので銭亀沢といひ、のち版を船に改字したといふ。

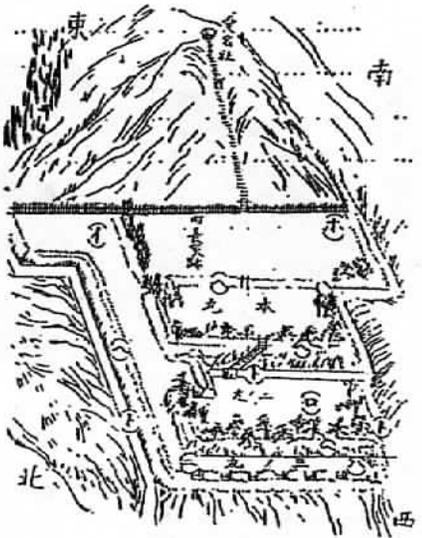
狭国、岡部、武蔵国、厚谷、若狭国、蛸崎、若狭国、とそれぞれは明らかになつてい  
が、これらのなかで、わりに早くから渡海して  
きていたと思われ一族は、志濃里館の小林氏  
である。  
志濃里館 小林氏の末孫が書いた履歴によれ  
ば、同氏は遠祖が上野国(群馬県)の住者で、  
良景の祖父に当たる次郎重弘の代に志海苔(も  
とは志濃里とか志苔と書いた)の地に渡つてき  
たという。すると室町初期、後述する安東氏の  
渡来以前に、すでに小林氏は来ていたのであつ  
て、諸館主のなかでも先住者だったようであ  
る。  
小林氏の館は、志海苔川東側の丘上にあり、  
いまにその跡がのこつていて、国指定(昭和九  
年一九三四)の史跡になつてゐる。志海苔の  
地名は、アイヌ語のウカウシラリ(重なつた岩)  
のシラリがシノリになつたといわれ、漢字では

前記のほかに志乃利、紫苔など、いろいろな字が当てられる。館の規模は大正十三年(一九二四)の『北海道史蹟名勝天然紀念物調査報告書』は、地積五、一二四坪とし、「南は崖下志苔市街を隔てて海に面し、西は志苔川に臨み、東は溪沢を割し、北は原野に連る。其形方形にして四囲に土塁を繞らす。西面の土塁は二重にして之を貫きて通路を設け正門とし、内塁の外方に空堀を穿つ。北は塁外に新塹濠を設け、東面の溪沢に連り、南は懸崖に臨む。土塁は幅五間乃至六間、高五尺乃至十尺、塹の深十四尺に達する所あり」と説明している。だが昭和四十三年(一九六八)の『はこだての文化財』では面積一四、九三三平方メートル(四、五一五坪)とし、昭和五十三年(一九七八)の『北海道の文化財』では指定面積を、一九、八三四平方メートルとしている。東北隅に井戸跡がのこっている。この館は箱館(後述)の四倍以上もあり、与倉前や弥右衛門川に支館ももっていた。与倉前館は良景の弟政景が守っており、弥右衛門川館は狼煙場(監視所)のようなものだったらしい。

箱館 箱館は前述のごとくアイヌ語地名をウスケシといったから、「字須岸館」と記す書もある。その場所や規模について『函館区史』は、「位置は今の函館支庁を中心として東西に亘りたるものの如く、本丸、二の丸等に分ち、周圍に土塁を繞らし左右に空濠を穿ちしと云ふ。其遺趾の一部は明治維新の頃まで尚ほ之を存したり」と記し、小林氏の志濃里館より大きかったとしている。だがこれは間重弘(不明) 良景(良定) (志海首題) (与倉前館) (与倉前館) (政景・季景) とともに永正九年自誓 その子らは蛸崎氏以後の松前氏に仕えた

小林氏系図

重弘(不明) 良景(良定) (志海首題) (与倉前館) (与倉前館) (政景・季景) とともに永正九年自誓 その子らは蛸崎氏以後の松前氏に仕えた



『函館沿革史』に描かれた河野氏の館の想像図

なごこの図では、館の正面が北西の弁天町の方に向いていたことになってしまいが、それはいかげであるか。常識からいえば、東方の十字街の方に向いていなければならぬのである。これには画かれておらぬが、墨郭内にはもちろん木造の屋舎があった。館は城砦の条件として高台に造られる場合が多いが、そういう意味では、わりによい場所だったと思われる。

ところで、箱館の館主河野政通については、その渡来はいきさつな

ど、やや詳しく述べる必要がある。それにはまず、津軽の安東氏の渡来から説明しなければならぬ。煩雑になるが、がまんして読んでいただきたい。

安東氏 前述のとおり、北条義時は鎌倉幕府の職のなかに蝦夷管領を置き、津軽の安東氏をこの職に任じた。奥羽・蝦夷島の蝦夷鎮撫にあてたもので、この職は鎌倉幕府滅亡ともになくなったが、それでも蝦夷島の管掌権は豊臣秀吉の時代まで安東氏に属したから、北海道史のうえでこの期間を(鎌倉初期から安土桃山初期まで)「安東氏時代」と呼ぶことが多い。その安東氏の本家ともいべき人が、道南に渡って来ているのである。

安東氏の遠祖は、大和の長髓彦の兄である安日王が、奥州に逃げてきて土着したのの後裔といわれ、これが安倍を称し、頼時とか貞任が出てくるわけで、頼時の代に安東太郎(安東太)を名乗り、前九年の役に生き残った貞任の次男高星は津軽藤崎城の城主となった。その子秀恒もまた安東太郎を称し、以下嫡流みなこれを称した。北条義時から蝦夷管領を命ぜられたのは秀秀の代で、のち愛秀の代に十三湊に移った。安東氏の系図は諸説あつて判じ難いが、途中、上国と下国に分かれて争つたことがあるらしい。だが、下国が栄えた。その下国安東太郎盛季の代、同家は南部義政に攻められた。南部氏は文字どおり南部(樺部)を領しており、とくに義政は盛季の娘を娶っていたのだが、津軽十三地方が欲しくなり、策をめぐらして安東盛季を攻めたのであつた。盛季は無念の涙を吞んで小泊に去り、そこから蝦夷島へ逃げ渡つたのである。女婿が舅を攻めるなんて、いかにも中世の話だが、『新羅之記録』はこの事件を、嘉吉二年から三年(一四四二-四三)の出来事としている。だが、中央の史料たる『満濟准后日記』には、永享四年(一四三三)のこのように記している。南部氏は永享年間にもまず攻め、いったん和陸してまた嘉吉年間に攻めたのかも知れない。とにかくこのようなことで、津軽安東の宗家である盛季が、室町初期に道南へ渡つて来た。前記のように安東氏は蝦夷島の管掌権をもつ家柄だから、その渡来の意義は大きい。ただし昔の話であるから、渡海前にすでに死んだと異説する書もある。また、その上陸地も矢不來(上磯町)だとか、松前だとか異説がある。だが、筆者は矢不來に上陸したとの説に賛成する。というのは、つぎのような事実があるからだ。



阿吽寺の如意輪観音(実は弥勒菩薩)

松前町に阿吽寺という真言宗の寺がある。その寺伝によると、山王坊という僧が安東盛季に随つて不動明王像その他を護持して渡海し、茂辺地(上磯町)に草庵を結んだのが寺基の始めだとしている。のち無住時代があつたそうだが、永正十年(一五一三)に松前へ再興して現在に至っている。ところがこの寺に、安倍貞任の念持仏と伝えられる如意輪観音(実は弥勒菩薩)もあつたのである。北海道唯一の推古時代の仏像として珍重されたが、昭和二十九年(一九五四)盗難にあつた。